

2023年6月25日(日)
文部科学省委託「高等学校における日本語指導体制の充実に関する調査研究」2023

高等学校における日本語指導・体制整備に関する研修
第1回 高等学校における日本語指導-「特別の教育課程」の導入に向けて-

「特別の教育課程」による日本語指導の実施に向けて

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育ユニット 齋藤ひろみ



1 実態把握から 指導・支援の開始まで

『高等学校における外国人生徒等の受け入れの手引』 p.38~

<生徒の実態把握から支援開始まで>

| | |
|--------------------|--|
| ①生徒の実態把握 | <p><入学前>・入学者選抜時や入学者説明会での様子 ・中学校からの引き継ぎ、入学者選抜試験の結果(得点等)</p> <p><入学後>・面接による聞き取りや日本語能力の測定の結果 ・学級担任、教科担当教員の学級での様子や授業中の様子</p> <p>以上の資料をもとに、学校として日本語指導、教科学習支援、文化面での配慮が必要かどうかを判断する。</p> |
| ②本人・保護者の意向確認 | 本人及び保護者と面談を実施し、学校の見立てを伝えるとともに、指導・支援、文化的宗教的側面への配慮を希望するかを聞き取る。 |
| ③指導内容、「特別の教育課程」の検討 | ①に基づき、日本語指導、教科学習支援(取り出し指導、入り込み指導)、文化的側面への配慮に関し、その内容を具体的に検討する。また、日本語指導を「特別の教育課程」として実施するかどうかを決定する。 |
| ④指導・支援者と実施形態の決定 | ③で検討した指導・支援を行うために、人的配置を行う(都道府県等に講師の配置等の人的対応を申請、地域の支援団体等に支援員派遣やボランティア紹介を依頼)。さらに、人の配置に応じて、指導の形態と時間数を決定する。修了までの履修計画を立てる。 |
| ⑤指導計画の設計・開始 | 指導内容・形態、時間数(単位数)に応じて指導計画を立て、指導・支援を開始する。「特別の教育課程」として実施する場合は「個別の指導計画」を作成する。 |

<入学時に把握しておくべき項目>

| | |
|------------|--|
| 入学説明会 | 年齢、国籍・在留資格、家族内言語、文化・宗教、家族構成等、経済的状況(奨学金の要否)、使用する名前(本名か通称名か)、日本語指導の希望の有無 |
| 入学後の 面談 | 上記項目の確認 来日日時、国籍・在留資格、配慮が必要な文化的習慣、卒業後の居住予定地、保護者の日本語の力、保護者の母語、連絡方法、健康面で配慮が必要なこと、これまでの日本語学習歴、教科の学習歴、発達特性、地域の学習支援等の有無、日本語の力(自己評価、面談をした教員による見取り)、卒業後の進路の希望 |
| その後の指導・支援で | 家族の職業や勤務時間、入学前後の面談で把握できなかったプライベートに関わる項目 |



2 指導・支援の 要否の判断

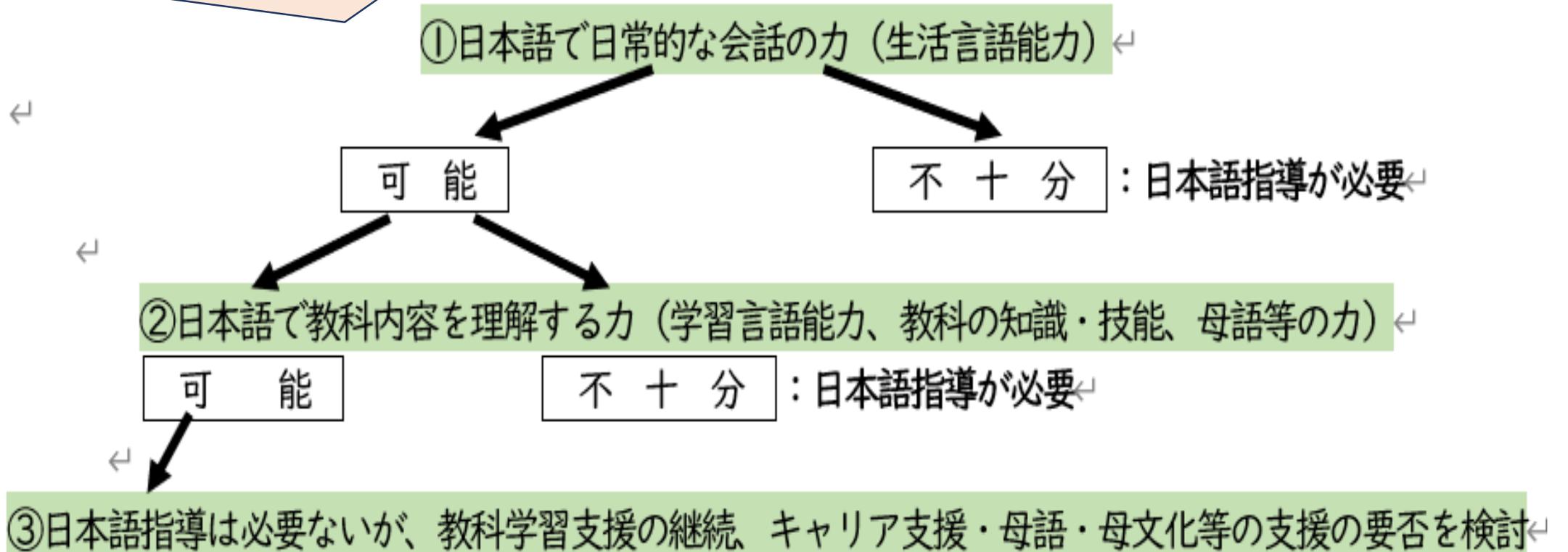
『高等学校における外国人生徒等の受入れの手引』 p.41～

『高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン』p.20～

< 指導・支援の要否判断の手続き >

指導・支援の要否を検討する対象生徒

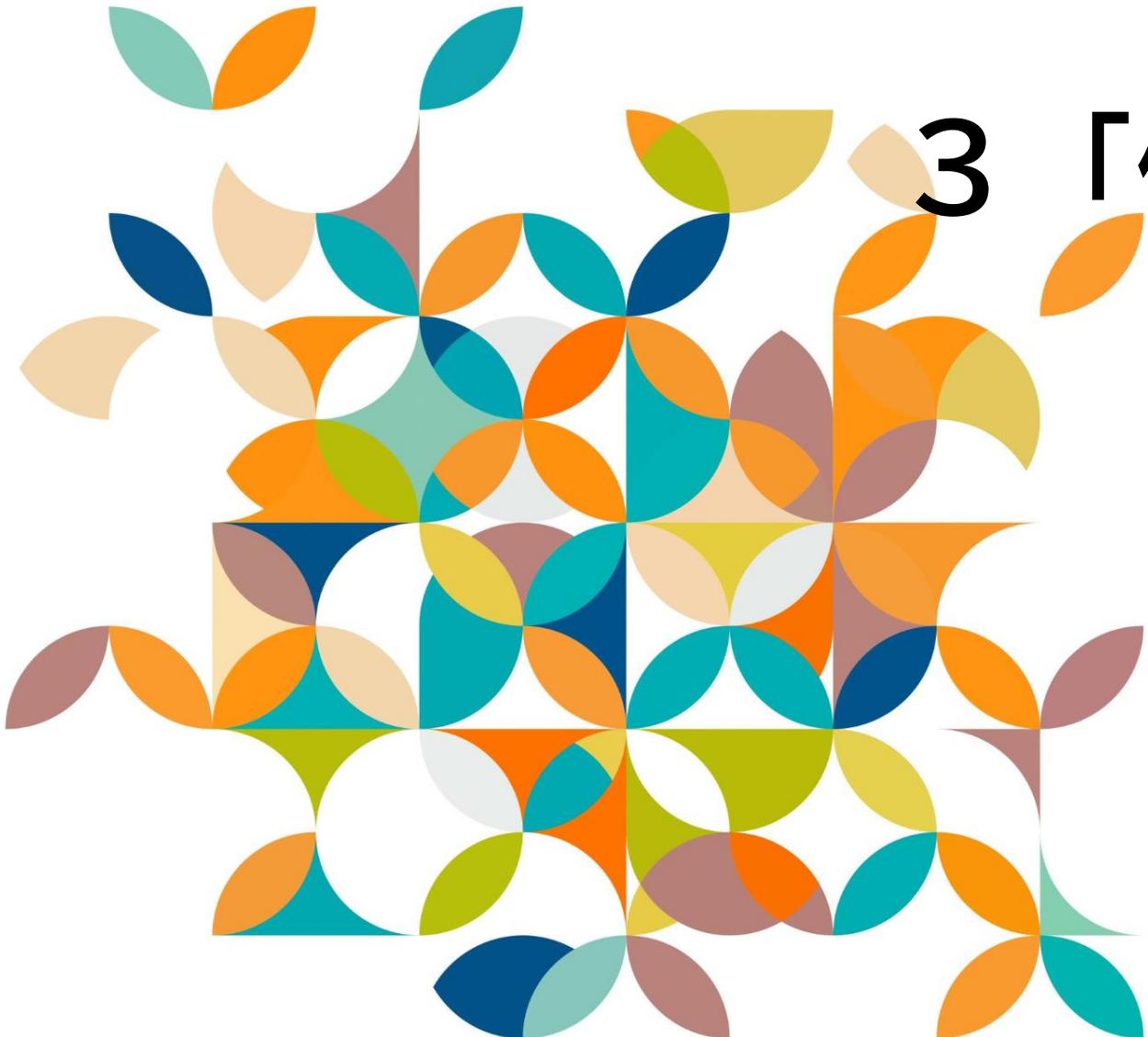
- ✓ 入学者選抜の特別定員枠を利用して入学した外国人生徒等
- ✓ 一般入学者選抜で入学した外国籍生徒
／日本国籍で多様な言語文化背景をもつ生徒



< 指導・支援対象になる3タイプの生徒 >

A～Cの生徒には、別室での取り出しの日本語指導や教科学習支援を行う。

| | 滞日期間 | 日本語の 日常会話 の力 | 教科学習 のための日 本語の力 | 母語等、 他の言語 の力 | 教科の知 識・技能等 | 日本語指導・教科学習等の 支援の要否 |
|---|-------------------|--------------------|-----------------------|--------------------|---------------|--|
| A | 短い | なし | なし | 学年相当 | 学年相応 | 必要 生活適応のための日本語指導 から開始 |
| B | 3年程度 | 対応可能 | 不十分 | 学年相応 | 学年相応 | 必要 日本語指導の基礎的内容の補 充と教科学習・自己実現のための 日本語指導 |
| | | 十分 | 不十分 | 停滞 | 遅滞 | 必要 教科学習・自己実現のための日 本語指導 |
| | | | 対応可能 | 学年相応 | 学年相応 | 必要なし(国際結婚家庭の生徒等の一 部のみ) |
| C | 4年以上 (日本生まれ含む) | 十分 | 不十分 | 未発達 | 遅滞 | 必要 教科学習・自己実現のための日 本語指導 |
| | | | 十分 | 学年相応 | 学年相応 | 必要なし |



3 「個別の指導計画」と 履修計画

『高等学校における外国人生徒等の受入れの手引』 p.42～

『高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン』p.25～

<「個別の指導計画」と履修計画>

個別の指導計画:日本語指導のみならず、外国人生徒等を対象とした日本語関連の教科・科目(学校設定教科・科目)、教科学習支援、またキャリア教育・多文化共生に関する取組等、指導・支援の全体について作成する。

| | | 外国人生徒等への支援・指導 |
|------|---------|---|
| 履修計画 | 個別の指導計画 | 「特別の教育課程」による日本語の取り出し指導・放課後などの日本語指導 |
| | | 外国人生徒等を対象にした日本語等に関する学校設定科目教科の取り出し指導・教科の授業への入り込み指導 |
| | | 進路指導・キャリア教育、母語母文化教育、多文化共生・社会活動参加への支援 |
| | | 教科等の授業 |

履修計画:在籍期間に対象生徒が、いつ、どの科目を履修するのかを計画する。日本語指導の時間を履修計画に配置し、教科と日本語学習を関連づける。「特別の教育課程の日本語指導」で代替する科目名と単位数を明示的に示す。

事例 日本語指導の課程上の位置づけ

『手引』

- ・川崎市立川崎高等学校 p.44－45
- ・私立敬和学園高等学校 p.47
- ・定時制課程・普通科高等学校 p.50

『ガイドライン』 p.61～63

- ・神奈川県立座間総合高等学校
- ・散在地域 定時制高等学校



4 日本語指導・教科学習支援 実施形態・場所

『高等学校における外国人生徒等の受入れの手引』 p.36～

『高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン』p.31～

<日本語指導・教科学習支援の実施形態・場所>

| | 実施形態 | 科目・時間 | 指導内容 | 場所 |
|--------|--------|-------------------------|----------------------------|------|
| 日本語指導 | 取り出し指導 | 選択科目等の時間に「特別の教育課程」として | 日本語(対象生徒向けに設計) | 別室 |
| | 補習(指導) | 放課後・長期休業時等に「特別の教育課程」として | | |
| | 一斉指導 | 日本語関係の学校設定教科・科目 | 日本語・言語文化等の外国人生徒等対象に構成された内容 | 一般教室 |
| 教科学習支援 | 取り出し指導 | 教科、学び直しのための学校設定教科・科目等 | 教科(対象生徒向けに調整) | 一般教室 |
| | 入り込み指導 | | 教科(通常授業) | |
| | 一斉指導 | | 教科(通常授業) | 別室 |
| | 補習(支援) | 教育課程外 | 日本語・教科(対象生徒向けに設計) | 別室 |

事例 取り出し指導

『ガイドライン』p.32-33

例1) 総合学科・全日制高等学校 1年次に集中的に取り出し指導を実施(令和4年度の実施例)

例2) 普通科・定時制(3部制)・単位制高等学校 3年間特定教科で取り出し指導を実施(令和4年度の実施例)

例3) 普通科・定時制(3部制)・単位制高等学校 1年次に入り込み指導を実施(令和4年度入学生徒のケース)



5 日本語の学習目標と指導 ー学年と課題による構造化ー

『高等学校の日本語指導・学習支援のための
ガイドライン』p.21～

<日本語教育の3つの課題>

- 1) 学校・社会生活への適応とコミュニケーションのための日本語の力の育成
- 2) 学習に参加し思考するための日本語の力の育成
- 3) 自己実現とアイデンティティの形成を支える日本語の力の育成

| | 全体の目標 | 3側面の日本語の目標 | | |
|---------|-------|-----------------------|------------------|------------------------|
| | | 生活適応とコミュニケーションのための日本語 | 学習に参加し思考するための日本語 | 自己実現とアイデンティティ形成を支える日本語 |
| 3年(修了時) | | | | |
| 2年 | | | | |
| 1年 | | | | |

例 日本語の学習目標

- コミュニケーション、学習参加、自己実現のための日本語の目標
- 各学年の習得・発達をイメージして目標を構造化

<1年時の3側面の目標の例>

| | |
|------------------------|--|
| 生活適応とコミュニケーションのための日本語 | 趣味や嗜好、身近な出来事について社交的なやりとりができ、わからないことや困った場合には、日本語で質問や要求したり、支援の依頼をしたりして問題解決のために行動することができる。 |
| 学習参加し思考するための日本語 | 教科の用語について母語で調べたり、教員や支援者によるやさしい日本語での説明を受け、学習経験のある教科については日本語で理解し、質問をしたり質問に答えたりすることができる。学習経験のない教科については母語での支援を得て理解したことを、日本語に結び付けて学ぶことができる。 |
| 自己実現とアイデンティティ形成を支える日本語 | 自身の文化や行動様式と日本のそれとの違いについて、日本語の学習や友人との交流を通して学び、感じた違和感や疑問を伝えるとともに相互が理解できるように行動することができる。 |

<日本語の4タイプのプログラム>

目標 → 指導内容・方法の決定 → プログラム化・・・4タイプを提案
複数のプログラムの配置により日本語指導計画を作成

プログラムA 「生活のための日本語」

来日後の日本での学校・社会生活を送るために必要な基本的な日本語の語彙・表現を学ぶプログラム。日本語を使って困難や問題を解決するために行動できるようになることを目標とする。

プログラムB 「日本語基礎」

日本語の基礎的な構造・意味・機能を理解し、生徒の生活場面や学習場面で運用できるようになることをねらいとする。日本語基礎は日本語の学習経験がない生徒を対象とし、順にⅠ→Ⅱ→Ⅲと積み上げて学ぶように構成されている。

プログラムC 「技能別日本語」

まとまりのある内容の文章・談話を聞いたり、話したりする力、そして、読んだり書いたりする力、を高めるプログラム。タスク(課題)を設定し、そのタスクを遂行するプロセスで、学習した日本語の基礎的な構造・意味・機能に関する知識を活性化し運用することを促す。

プログラムD 「日本語プロジェクト」

外国人生徒が共生社会の一員として自己を実現し、よりよい社会をつくるために、実際に問題・課題を解決する活動(プロジェクト)を通して、思考し、判断し、表現するためのことばの力を高めることをねらいとする。

<目標に基づく日本語指導計画>

－日本語プログラムの組み合わせ－

<タイプAの生徒の場合>

滞日期间が短く、日本語学習経験がほとんどない生徒を対象にイメージしたものです。
 学年相応の母語の力や思考力などがあり、言語を分析的に捉えることや、自分で学習する力
 があることを想定しています。

| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 |
|-----------------------|----|----|----|----|
| プログラムA「生活の ための日本語」 | | | | |
| プログラムB「日本語 基礎」 | | | | |
| プログラムC「技能別 日本語」 | | | | |
| プログラムD「日本語 プロジェクト」 | | | | |

日本語プログラムA～Dを組み合わせ、日本語の指導計画を立てる
 詳しくは 第1回対面研修(7月27日午後)に



『高等学校の 日本語指導・学習支援のための ガイドライン』

https://www2.u-gakugei.ac.jp/~knihongo/feature/upload/koko_nihongo_guideline.pdf

第3部 実践例・事例・声

- 1 外国人生徒等のための教育課程の編成例
- 2 日本語指導の実践例
- 3 教科学習支援の実践例
- 4 キャリア教育・支援の実践例・事例
- 5 多文化共生教育の実践例・事例
- 6 多文化を生きる元高校生の声

第4部 日本語プログラムA～D